

近畿地方の万葉集と風景画シリーズ（第四十三回）

「かり 狛

ぢ 路」

ひさかたの あめゆ 天行く月を あみ 網に刺し

わが おほきみ 我が大君は きぬがさ 蓋にせり

作者 柿本人麻呂 卷三―二四〇

（解説）遙かな天空を渡る月を鳥でも刺すように網にとらえて
わが主君はその月を きぬがさ 蓋にしていらつしやる。

○この歌の題詞は「ながのみこ 長皇子、かりぢ 狛路の池に遊す時に、いでま 柿本朝臣
麻呂が作る歌一首 併せて短歌」すなわち反歌である。

○「ながのみこ 長皇子」は天武天皇（第四十代）の第四皇子。

○空に出た月を背景にして立たれた皇子の姿をこのように見立
て、皇子の威勢を たた 讃えた。

○「月を網に刺し」と言ったのは狛場での歌だからであろう。

○「蓋（きぬがさ）」は貴人の頭上に差しかける長柄の大型の傘。
いかめしく飾りたてる手立ての一つ。

○「狛 路」は未詳であるが奈良県中部の桜井市から北東部に
ある宇陀市あたりが山々が多く狛場に適しており、いくつ

かの説があるようであるが有力な説として桜井市南部にある多武峰とうのみね（標高六一九m。山頂は御破山と云う。）の中腹に飛鳥時代の貴族・政治家であり大化改新（国政改革）の中心人物であつた藤原鎌足公を祀る談山神社が鎮座する。その東南、約一キロメートル離れた多武峰の鹿路ろくろ（桜井市）一帯との説がある。

（参考文献）新潮日本古典集成・伊藤博氏等校注「萬葉集一」等

（写生地）この歌の万葉歌碑が桜井市鹿路の近くに鎮座する談山神社参道の古い山門（東）の横地に建てられている。

この辺りは昼でもうす暗く猟場の風景を今に伝えてくれるような談山神社東山門一帯を描く。（池田杏花）

